

ライティングサポートデスク報告

ライティングサポートデスクにおけるチューター育成 —2021 年度新人チューター研修報告—

ライティングサポートデスク担当
相場 いぶき

1. はじめに

2020 年春学期からの授業のオンライン化に伴い、本学ライティングサポートデスク（以下 WSD）も予約セッションを完全オンライン化して現在に至る。ライティングサポートのオンライン化は利便性が高く、利用者、チューター双方から好意的に受け入れられており、対面時に比べ大きく利用者数を伸ばしている⁽¹⁾。コロナ禍が続く学生同士がつながる機会の減少が危惧される中、学生が学生を支えるピア・チュータリングを基本とした WSD の存在意義は高まっている。その一方で、WSD のライティングサポートを支えるチューターが果たし得る役割については、広く周知されているとは言えない。本稿では、2021 年度に行われた WSD 新人チューター研修をもとに、本学のライティングサポートを担う大学院生チューターの育成過程を報告し、今後の課題について述べる。

2. 他大学におけるチューター研修

日本国内の大学におけるライティングサポートの中核を担うのは大学院生チューターで、学部生または教員がサポートに当たる例は少ない（相場，2020）。本学のライティングサポートも、一部の英語文書のサポート以外はすべて大学院生チューターが担当している⁽²⁾。大学院生がチューターを務めるためには事前に研修が必要であるが、その内容は大学ごとに異なる。大学ライティングセンターのチューター育成に関する詳細な報告は少ないが、以下に二つの例を紹介する。

佐渡島・太田（2013）は、早稲田大学ライティング・センターの理念と実践に加え、チューター育成の過程を詳細に示している。チューターを志望する大学院生は、書類審査と面接を経て、新人オリエンテーションと実地研修を約一か月かけて行い、さらに採用後も一定の水準を保つための審査が 2 回あるという。実地研修は実際のセッションの見学とセッションの担当をそれぞれ最低 5 回ずつ行い、それをベテラン・チューターが助言しながらサポートするというもので、ピア・チュータリングの実践にもつながっている。

国外では、米国のリベラルアーツ・カレッジの一つである Dickinson College の例が挙げられる。Lape（2020）は、同大学にある二つのライティングセンターのうち、多言語の文書に対応する Multilingual Writing Center（MWC）におけるチューター研修の内容を紹介している。この研修は各学期の開始前に丸一日かけて行われ、チューターとそれぞれの外国語科目を担当する教員と一緒に参加し、実際の文書をもとに助言の仕方などを学ぶものである。外国語担当者を巻き込んだ研修は、MWC、チューター、

教員という三者の連携を密にし、ライティングサポートの手法をそれぞれが共有することを可能にしている。

3. WSD における新人チューター研修

3-1 新人チューター研修の目的と概要

新人チューターに対する研修内容は、それぞれの大学におけるライティングサポートの実情や目的によって異なる。本学では、WSD の理念やチューターの役割について理解を深めるとともに、ロールプレイや実際のセッション体験等の実践から、対話を通じて書き手をサポートする手法を学ぶことを目的として新人チューター研修を行っている。チューターの採用と研修は、春学期と秋学期の年 2 回、英語チューターと日本語チューターに分かれて行われる。応募者は、志望理由や経歴を記載した志願書と文書サンプル（過去に執筆したレポート等）を提出し、それらのスクリーニング後の面接を経て、新人チューター研修に臨む。応募から研修終了までのプロセスには約 1 学期間を要するため、チューターとして活動できるのは次の学期からとなる。

3-2 応募から採用・研修までの全体スケジュール

新人チューターの採用から研修までの全体スケジュールは、図 1 に示すとおりである。2021 年春学期は英語チューターが十分に確保できていたため、日本語チューターのみ採用、研修を行った。具体的には、まず 4 月上旬に WSD ウェブサイトや学内のポータルサイト上で応募を呼びかけ、4 月下旬に応募者と担当教員（筆者）および WSD スタッフとの面談を行った。そこで採用が決定した新人チューターは、5 月から 6 月にかけて筆者が担当する新人チューター研修に参加した。春学期は、応募者 7 名のうち 7 名全員が採用となり、研修は 2 グループに分かれて行うこととなった。なお、春学期の大学院生の英語チューターの採用は見送られたものの、学部生の英語チューター育成コース (ELG301: The Foundations of Tutoring Academic Writing) は開講されており、チューターを志望する修了者は秋学期以降、English for Liberal Arts Program (ELA) 課題のサポートに限定してチューターの役割を果たしている。



図 1 2021 年春学期の全体スケジュール

秋学期は、日本語チューター 1 名、英語チューター 6 名が採用され、それぞれ図 2 に示すスケジュールで研修が行われた。募集は 9 月上旬から春学期同様の手順で開始され、日本語チューターに関しては、9 月下旬に担当教員と WSD スタッフが面接を行い、採用決定後、10 月から 11 月にかけて研修を実施した。英語チューターの研修は ELA

教員が担当した。秋学期の日本語チューターへの応募は例年少ない傾向があり、2020年度の応募者は3名と少数であったことから、人員の確保が課題である。なお、春学期の日本語チューター志望者が7名と多かった理由は、日本語教育プログラムが冬学期に開講する大学院共通科目「研究者のための論文作成法（日本語）」修了者へのリクルートが功を奏したためである⁽³⁾。



図2 2021年秋学期の全体スケジュール

春学期と秋学期の採用から研修までの流れは同じであるが、研修後、チューターとして活動するまでの期間が異なる。秋学期は11月に研修終了後12月には早速ライティングサポートを担うことになるが、春学期の研修後は2か月以上の夏休みをはさむため、6月に研修を終えた新人チューターが実際に活動できるのは、早くても9月からとなる。よって、このような空白期間が心配と思われる新人チューターには、活動開始前に復習の機会を設けている。2021年9月には2名の日本語チューターが担当教員との振り返りを行った。

4. 日本語新人チューター研修の詳細

4-1 研修の方法と内容

ここからは、筆者が担当した日本語新人チューター研修の詳細を述べる。WSDにおける新人チューター研修は、2020年春学期のオンライン化に伴い、同年秋学期からZoomを用いて行われている。主にWSDの理念やチューターの役割を学ぶ全体研修と、より実践的な課題に取り組む個別研修を組み合わせ、合計5コマ相当（1コマ70分）が当てられる。当初は研修者と担当教員のやり取りはメールで行っていたが、2021年春学期から研修者が増加したこともあり、資料や課題の配布と管理にはGoogle Classroomを用いている。研修自体は担当教員1名が行うが、WSDスタッフ1名も研修者のスケジュール調整や連絡等のサポートに入っている。

WSDの理念である「対話を通じたライティング支援」を体感するためにも、全体研修は教員による一方的な講義形式ではなく対話形式で行われ、研修者同士の話し合いや、参加してくれた先輩チューターへの質疑応答、先輩からのアドバイスを重視している。表1は2021年春学期の新人チューター研修の内容である。5つのTrainingのうち、全体研修は3つ、個別に取り組む実践が2つ、課題が3つとなっている。

表1 新人チューター研修の内容（2021年春学期の例）

	研修内容	形式	課題
Training 1	WSDの理念とチュートリアル	全体 (Zoom)	
Training 2	ビデオ自習、セッション体験	個別の実践	① ビデオから得た気づき
Training 3	ビデオ振り返り、先輩によるデモセッション、ミニロールプレイ	全体 (Zoom)	② Observation Sheet
Training 4	セッション体験振り返り、ロールプレイ、フィードバック(まとめ)	全体 (Zoom)	
Training 5	先輩とのデモセッション	個別の実践	③ デモセッションレポート

4-2 Training 1：WSDの理念とチュートリアル（全体）

全体研修の第1回目である Training 1では、これまで WSD で研修を担当した教職員や先輩チューターが蓄積してきた資料をもとに、対話形式で WSD の理念とチューターの役割を学ぶ。資料は事前に Google Classroom で共有し、研修では担当教員が研修者に質問を投げかけ、また、研修者同士で意見を出し合うなどして理解を深めてゆく。資料は、WSD の理念や事務手続きに関する 12 ページにわたる「WSD チューター・マニュアル」、チューターの役割や具体的なセッションの内容に関する「WSD とは?」、対話を通じたサポートのコツをイラストで示した「質問ベースって何?」に加え、チューターの経験（実践）に基づく「オンラインチュートリアル Tips」、 「困難だった点のまとめ」等である。筆者はこの中から「WSD とは?」をもとに PPT スライドを用意し、研修者の考えを引き出しながら全体研修を行っている。具体的な内容は、WSD でサポートできる文書や内容の確認、チュートリアルの時間配分やポイント、剽窃が疑われる際の対応、専門知識のあるチューターとないチューターそれぞれの強みと弱み、質問をベースにしたサポートのすすめ方、等である。

4-3 Training 2：ビデオ自習とセッション体験（個別）

Training 2 は、課題として提示されたビデオの自習とセッション体験という個別の実践である。ビデオ自習では、トレーニング用に作成された Good Case と Bad Case それぞれ 2 ～ 3 分のデモビデオを視聴し、気づいた点を 5 つずつ箇条書きする（課題①）。ここでの気づきについては、後に Training 3 の全体研修で話し合いを行う。

セッション体験では、実際の WSD セッションを予約し、先輩チューターから実際にサポートを受け、チェックリストと見学メモからなる 2 ページの Observation Sheet を書く（課題②）。ここでの目的は、利用者の立場でサポートを受けることによってチューターの声がけやサポートが果たす役割を体感することである。

4-4 Training 3・4：先輩によるデモセッションとロールプレイ（全体）

2 回目の全体研修である Training 3 の冒頭では、課題①のビデオ自習の振り返りを行う。研修者から出された気づきは Google Docs に書き込み、可視化して共有することによって、一人では見落としていた点にも目を向ける機会としている。

次に、先輩チューター 2 名による短いデモセッションを観察し、その後先輩 1 名とペアを組み、5 分程度のミニロールプレイを行う。この時点でチューター役を務めるのは難しいと感じる研修者も多いが、ここではうまくロールプレイをこなすことよりも、チューター側の目線に立つことを第一の目的としている。ロールプレイのために設定したケースには、以下のようなものがある。

- ケース 1：テーマが決まっておらず何をしたいかわからない
- ケース 2：アイデアはたくさんあるがテーマが絞れない
- ケース 3：課題に興味がなく何もアイデアが出せない
- ケース 4：文献の探し方や引用ルールがわからない

続く Training 4 は 3 回目の全体研修であり、基本的な流れは Training 3 と同様である。まずは課題②のセッション体験の振り返りを全体で行い、各自気づいた点を可視化して共有する。その後、研修者同士で少し長めのロールプレイ（10 分程度）を行い、チューター、書き手（相談者）、観察者の 3 つの異なる視点から感想や意見を述べる。ロールプレイのために設定されたケースは Training 3 と同様である。最後にまとめとして不安な点がないかを確認し、Training 5 へと続く。

4-5 Training 5：先輩とのデモセッション（個別）

Training 5 はこれまでの研修の集大成とも言える、実践的な個別研修である。ここで研修者は、実際の WSD セッションの一枠を予約し、先輩チューターを書き手としたデモセッションを行う。時間は実際のセッションと同じ 40 分間で、その後、先輩からのフィードバックをもとにデモセッション・レポートを書く（課題③）。後日 Google Classroom に提出されたレポートを担当教員が確認し、チューターとして活動可能かどうか最終判断を行う。

以上は 2021 年春学期における Training 5 の内容だが、担当教員が実際のデモセッションを見ることなくレポートの内容のみで最終判断を下すことに対しては以前から疑義があった。よって、2021 年秋学期からは録画したデモセッションを担当教員とともに視聴しながら振り返りを行い、研修が足りないと感じた場合はトレーニングを追加することとなった。2021 年秋学期は 1 名の研修者と筆者がこれを行ったが、動画をもとにした振り返りは研修者、担当教員双方にとって大変有意義なものとなり、この手法が有効であることが実感できた。当初心配されたビデオ録画による研修者への心理的負担は特に見られず、動画はむしろのちの振り返りの助けになったとの感想を得ている。

5. 研修後のフォローアップ

5-1 チューター・ワークショップ

応募から採用、研修までの約 1 学期間は、チューターを志す学生たちにとって決して短い時間ではない。しかし、実際に Training 1～5 に費やす時間は正味 5 コマ程度であ

り、これが十分と言えるかどうかは検討の余地があり、研修者によっても認識は異なっている。研修が終わった後もチューターの成長を支え続けるために、2020年度からは新人チューター研修のみならず、すでに活動している先輩チューターも対象にしたワークショップが行われている。現在でも学期に2回のチューター会議は行われているが、主に事務連絡や調査結果等の情報共有の場となっているのが現状である。それに対し、チューター・ワークショップはチューターの要望を考慮し、より実践的に即したブラッシュアップの機会となっており、各学期1回の出席が義務付けられている。

現在、チューター・ワークショップはELA講師2名が主催しており、すべて英語で行われている。これはWSDは一つの組織であり、日本語、英語といった言語ごとにチューターを分断せず、みな同じ理念のもとで活動しているためである。しかしライティングサポートのポイントには言語による違いがあり、また、英語で行われるワークショップで日本語チューターが発言するのが難しいとの声もあったことから、2021年秋学期からは日本語チューターに特化したワークショップも開始したところである。第一回目は、チューターの具体的な発話に注目し、書き手の思考を引き出す「声かけ」とは何かを考察した。今後は日本語文書特有の引用の仕方や、レポートの形式に重点を当てたワークショップを開催する予定である。

5-2 座談会

新人チューター研修やワークショップを行うのは日英それぞれの担当教員であるが、実際にチュートリアルを行っていない、いわば「外」からの目線での指導には限界がある。実際のライティングサポートのコツは、実践を重ねた先輩チューターから学ぶことができるとの考えから、2021年春学期から座談会を設けることとなった。日本語と英語のベテラン・チューターがそれぞれZoomで開催し、任意参加でざくばらんに日ごろの悩みを相談し合う機会となっている。このような座談会は、ピア・チュータリングや対話を通じたサポートの良さを再確認する機会にもつながっている。

ほかにも、新人チューターと先輩チューターをペアリングする「メンター制度」の構想もあるが、先輩チューターの負担が大きい点からまだ実現できていない。

6. 今後の課題

以上、本学WSDにおける新人チューター研修の内容を、日本語チューターの育成に焦点を当てて述べた。研修はこれが完成形ではなく、これまで蓄積されてきたノウハウと現状を考慮し、今後も修正を重ねていかなければならないのは言うまでもない。さらなる改善に向けて、最後にもう一度WSDの理念と現状を振り返り、今後の課題を挙げる。

日本国内の大学におけるライティング支援は、「自立した書き手を育てる」という理念のもと、添削を行わず、対話を通して気づきを与えることを重視しており、これは2004年設立の早稲田大学ライティングセンターの理念がもととなっている。また、文章作成のどの段階（構想から最終稿まで）にも対応するという考え方は、1980年代アメリカのWriting as a process運動からきており、両者がそのまま今日のWSDの理念やサポートの特徴となっている。WSDはこのような理念のもと行ってきたライティン

グサポートを 2020 年春学期からオンライン化したが、これについてはチューター、利用者双方から肯定的な反応を得ており、対面授業に戻っても選択肢として残すことを希望する声は多い(相場, 2021)。また、オンライン化が始まった 2020 年以降の WSD 利用件数を見ると、特に 1 年生の利用が増加しており⁽⁴⁾、コロナ禍における学習不安の解消手段としての WSD の利用につながっていることがうかがえる。WSD のオンライン化は単に利便性が高いというだけでなく、学生の心理的「よりどころ」としての機能も果たしていると言えるだろう。

その一方で、日本語を学ぶ学生へのサポート件数はオンライン化後もゼロに等しく、日本語学習者へのサポート手段としての機能を果たしているとは言い難い。現在の新人チューター研修が日本語学習者のサポートを考慮した内容となっていない点は、日本語コースを担当する教員が WSD に学生を送りにくくなっている要因の一つと考えられるため、今後の検討課題としたい。

また、より良いライティングサポートのためには「連携」が必要不可欠である。図 3 は書き手(相談者)、チューター、教員の連携を示したものであるが、一見あたり前ともいえるこのような連携が、果たして今、完全になされていると言えるだろうか。書き手とチューターが WSD のライティングサポートによって連携することが大切であるの言うまでもないが、書き手自身が出された課題としっかりと向き合うことによって教員と連携することもまた、同じくらい大切なのである。そして現在最も不足しているのは、チューターと教員との連携である。現状では両者をつないでいるのは書き手が持ち込む課題のみであるため、もしそこでチューターが教員の意図を取り違えれば、適切なライティングサポートを行うことは極めて難しくなってしまう。反対に、教員がチューターの果たし得る役割を正確に理解していなければ、WSD の理念に反して添削等の間違っただけの要求につながりかねない。両者の連携を強化するために、今後 WSD はより一層サポート内容の周知に努めるとともに、教員側からの要望にも耳を傾けていくべきであろう。

2021 年 10 月 29 日に本学で行われた研究例会「ICU におけるライティングサポートデスク(WSD)の役割—どのように学生と教師に役立つか—(The Role of the Writing Support Desk (WSD) at ICU- How it can help students and faculty -)」⁽⁵⁾は、小規模ながら対象者や言語を限定せずに参加者を集め、WSD におけるライティングサポートとチューター育成の現状を共有し、教職員や学生が意見を交わす機会となった。今後も WSD がこのような場を積極的に設け、書き手、チューター、教員の三者の連携を模索することが、より良いライティングサポートにつながってゆくだろう。

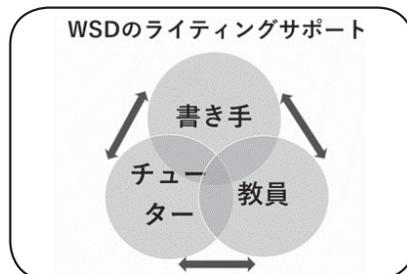


図 3 ライティングサポートにおける連携

注

- (1) WSD のセッション予約件数は、2020 年春学期の 164 件に対し、2021 年春学期は 235 件に上っている。
- (2) 学部生の英語チューター育成コースである ELG301:The Foundations of Tutoring Academic Writing 修了者に限定して、学部生チューターを採用している。
- (3) 日本語チューターのリクルートに際しては、日本語教育プログラムの先生方から学生へ声がけをしていただいた。この場をお借りしてお礼申し上げたい。
- (4) 1 年生の WSD 利用件数は、2019 年度は 78 件であったのに対し、2020 年度は 181 件と、2 倍以上に伸びている。
- (5) 本学のグローバル言語教育研究センターと学修・教育センターの共催で、WSD スタッフ、ELA 教員、筆者の 3 名が、WSD の利用方法と利用状況、英語と日本語のチューター育成について紹介した。

参考文献

- 相場いぶき (2020) 「大学ライティングセンター一覧」2020 年 10 月 10 日 ICU RCGLE 講演会配布資料
- 相場いぶき (2021) 「2020 年春学期におけるライティング支援のオンライン化ーライティングサポートデスクの取り組みー」『ICU 日本語教育研究』17, 77-82.
- 佐渡島沙織・太田裕子 (2013) 『文章チュータリングの理念と実践ー早稲田大学ライティング・センターでの取り組み』ひつじ書房
- Lape, N. (2020). *Internationalizing the writing center: A guide for developing a multilingual writing center*. South Carolina: Parlor Press.